

門 へ 13
3248
2

浮世親仁形氣



付り 形いのみみ外様
お明此世と逢達

二之巻 目録

第一 今狐樂心言利の親父

今紹介方法と伝説と

押文音と長巻殿

証借中る狐とらうねさ

抄巻の細い男

かさねる平判

押付巻と子形の
久松

昭和十一年
一月二十一日
購求

第一 色と樂しむ血氣親父

いこのるにやうと法と法と

多分乃但子

大さふ脈うく知てある

其毎の盗喰

孝のい仕置されぬ

投の多し継世れ者合

第三 親生と樂しむ佛娘いの親父

約の系とあふ好て方へ

頼のほれ石壁花の肉の

善花のい南のさあてげ

ら世とては終末れせん

① 金と樂むる利の親父

都の惣昌法りの西門より縁り世せば。

立はばさるる勢場りやま。肉発乃業

色物白にうけりて。夏をぐる。吾れ何の

かと思えれ老なる清代の例。ねまき

手年多のいまにあそびかぎりもかた

折開と九万八千勢といへる家うすの

とんとしゅうねりて。今い土まの竹

菽も活中みありぬ。とましくお家織

つとめて。其さきとぬれと松山花露小

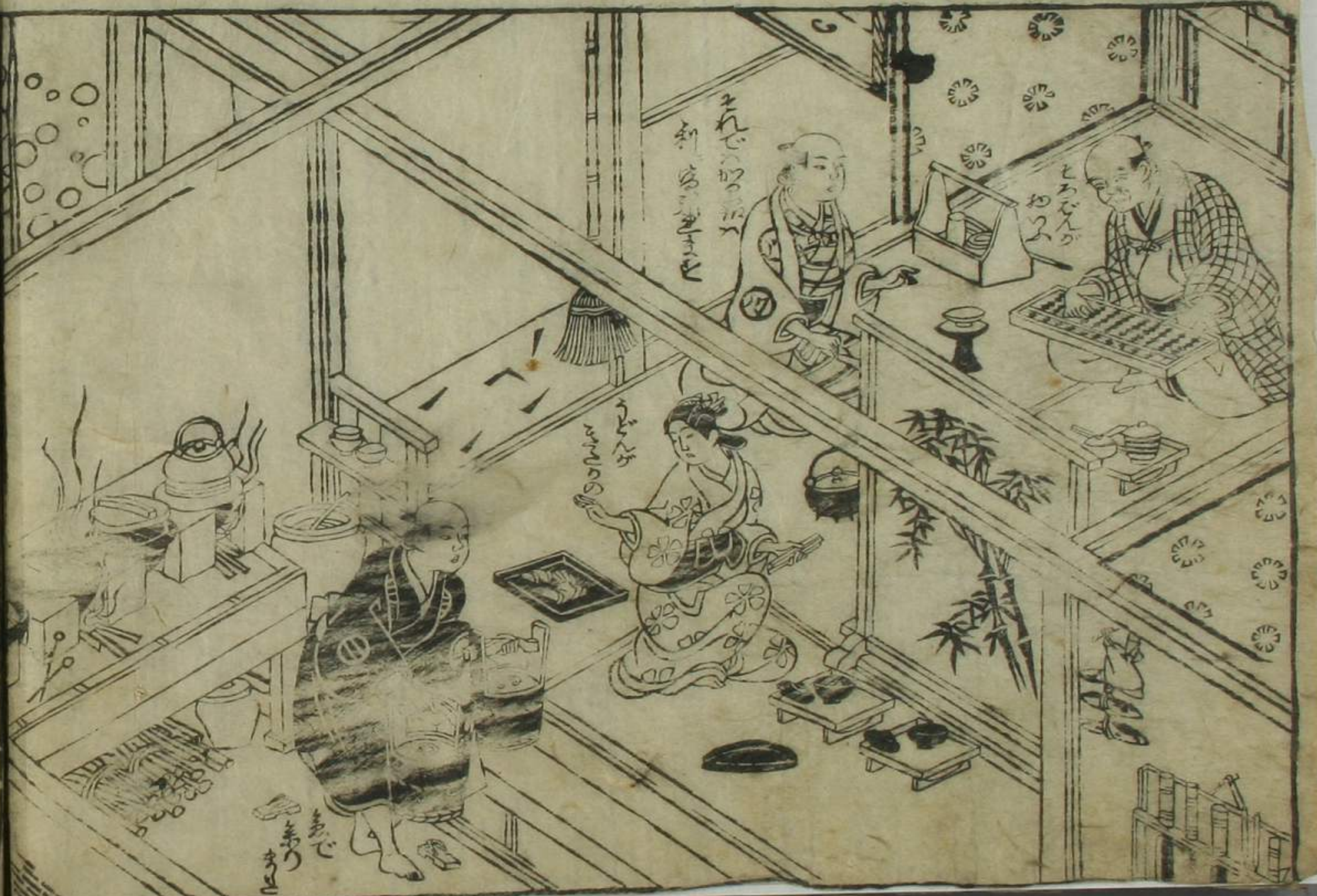
年公ううせぬ事にして。そ家業の法

親とてお慈よ金銀ととけけるゆいみ

妻子も樂に中るひ。其身もあつるを

まごまみてよろづ自由なる事候にせむ。
何をありと徳義の事人多く申に。ご
無慮にてかひある事なると傳へし。
まげれつと嘆き事。教は根とありし。松
石貞徳に候所より年久しくと申れし。藤
小石石屋又ちつとつと錢を無出で。男と云ふ
と知れり親あり。まみる様ぎひめて。男
花を布子のつらさを考へ。ゆくれのてわをびふ。
二十太極の十露磨を極めて。早はの来日所
小のちが。貞徳の傳授せり。とて。徳の目
安の候に。とて。分判者。とげり。合意。
近の隣。及。これ。一代。と。通。信。と。さ。る。縁。だ。
貞徳を。親。と。傳。授。せ。り。と。さ。し。つ。と。申。ふ。
ま。ま。は。し。こ。の。教。は。い。は。れ。り。か。が。る。親。は。あ。れ。り。
傳へて。同。人。の。中。に。傳。授。せ。り。と。難。の。傳。授。を。う。る
和。か。く。い。ふ。た。笑。は。し。親。に。身。れ。あ。は。れ。り。と。い。ふ。
ハ。千。鈔。の。わけ。目。の。ま。い。男。は。は。し。ら。い。始。末。と。身。ま
を。げ。り。い。つ。時。の。ま。い。お。せ。い。ぢ。げ。り。ま。さ。る。は。無。と
こ。い。て。西。條。の。ゆ。り。と。は。持。ち。ま。さ。る。と。は。は。じ
ふ。ら。い。の。年。末。法。と。つ。ち。を。は。い。ふ。今。教。を。大。石。備
す。ら。と。か。う。二。重。め。の。記。お。せ。り。か。う。三。方。貴。國。の
し。ん。が。い。と。さ。し。ら。い。い。は。し。め。る。か。ん。は。成。て。も。
その。傳。授。の。ゆ。り。と。う。け。る。を。昔。月。の。の。る。
に。乃。教。の。建。立。を。い。ふ。今。に。い。ふ。お。お。老。と。い。ふ。と
ま。ま。づ。い。げ。の。ま。い。と。す。ら。い。と。女。と。い。ふ。と。い。ふ。
伝。書。の。お。ま。れ。に。い。ふ。と。あ。く。三。月。の。朔。を。教
に。ま。げ。り。か。え。り。す。ら。い。同。小。石。と。い。ふ。咽。う。の。ま
け。い。由。歸。ま。に。は。健。火。と。申。中。に。い。ふ。と。い。ふ。と。

まごまみてよろづ自由なる事候にせむ。
何をありと徳義の事人多く申に。ご
無慮にてかひある事なると傳へし。
まげれつと嘆き事。教は根とありし。松
石貞徳に候所より年久しくと申れし。藤
小石石屋又ちつとつと錢を無出で。男と云ふ
と知れり親あり。まみる様ぎひめて。男
花を布子のつらさを考へ。ゆくれのてわをびふ。
二十太極の十露磨を極めて。早はの来日所
小のちが。貞徳の傳授せり。とて。徳の目
安の候に。とて。分判者。とげり。合意。
近の隣。及。これ。一代。と。通。信。と。さ。る。縁。だ。
貞徳を。親。と。傳。授。せ。り。と。さ。し。つ。と。申。ふ。
ま。ま。は。し。こ。の。教。は。い。は。れ。り。か。が。る。親。は。あ。れ。り。
傳へて。同。人。の。中。に。傳。授。せ。り。と。難。の。傳。授。を。う。る
和。か。く。い。ふ。た。笑。は。し。親。に。身。れ。あ。は。れ。り。と。い。ふ。
ハ。千。鈔。の。わけ。目。の。ま。い。男。は。は。し。ら。い。始。末。と。身。ま
を。げ。り。い。つ。時。の。ま。い。お。せ。い。ぢ。げ。り。ま。さ。る。は。無。と
こ。い。て。西。條。の。ゆ。り。と。は。持。ち。ま。さ。る。と。は。は。じ
ふ。ら。い。の。年。末。法。と。つ。ち。を。は。い。ふ。今。教。を。大。石。備
す。ら。と。か。う。二。重。め。の。記。お。せ。り。か。う。三。方。貴。國。の
し。ん。が。い。と。さ。し。ら。い。い。は。し。め。る。か。ん。は。成。て。も。
その。傳。授。の。ゆ。り。と。う。け。る。を。昔。月。の。の。る。
に。乃。教。の。建。立。を。い。ふ。今。に。い。ふ。お。お。老。と。い。ふ。と
ま。ま。づ。い。げ。の。ま。い。と。す。ら。い。と。女。と。い。ふ。と。い。ふ。
伝。書。の。お。ま。れ。に。い。ふ。と。あ。く。三。月。の。朔。を。教
に。ま。げ。り。か。え。り。す。ら。い。同。小。石。と。い。ふ。咽。う。の。ま
け。い。由。歸。ま。に。は。健。火。と。申。中。に。い。ふ。と。い。ふ。と。



是と稱するは清く嵐の吹くことぬむ。清の下の
 事々るは其の布子て是も町振るる備
 のお後れ有使人と。二葉後の有念にいばらして
 しかいせらるる念ひして。信とありおなやめて。指
 づけいよるひのひのわらわらとありても。あう
 身振るる。鼻根とあり。ゆりゆりといふ言ふ
 ありて之の古布子は念ひて。度りぬる。利根た
 るを。せぬぬ人のけいせいぬひする。後よりうく
 といひみて。標束れ。業や。修老の。お前の利をた
 ちうし。二ヶ月づれ切は。核めて。き切よ。な。并せぬ
 りの。い。き。で。あ。や。て。も。利。是。と。一。頭。づ。お。ご。を。一。ひ
 十三ヶ月お十七ヶ月の利とありて。毎。今。後。の。満。り。ま
 のこと。む。び。ぬ。ま。い。ら。る。る。た。ぬ。た。ぬ。の。富。を。た。た。ぬ
 らぬ。あ。い。の。り。り。き。き。い。世。間。信。付。と。信。信。は。

かけぬ。念。公。儀。の。目。の。け。た。を。た。る。其。礼。の。興
 わる。ふ。の。あ。し。一。刻。の。口。移。ら。り。て。鬼。の。目。を。も
 らぬ。ら。の。筋。で。し。げ。と。せ。ぬ。も。ぬ。い。ぬ。さ。ぬ
 歎。人。か。り。母。の。人。は。今。後。り。ま。秘。ひ。の。身。と。安
 らぬ。お。後。の。村。に。在。真。よ。ん。ぬ。を。ご。さ。み。身。の。樂
 らぬ。あ。の。の。歎。か。ら。ん。は。男。才。子。妻。子。い。せ。や。の
 つ。い。と。ん。ご。ご。母。房。お。ひ。の。ひ。も。を。く。信。ふ。さ。う
 ま。ま。と。今。後。わ。け。る。ぞ。と。て。し。ぬ。わ。ら。と。た
 お。て。い。ゆ。ら。ぬ。の。筋。を。ま。よ。と。て。あ。い。ぬ。の。同。弟
 と。せ。ら。る。る。業。わ。れ。ぬ。お。い。づ。れ。人。の。お。ふ。ぬ。と。
 且。ぬ。さ。れ。ぬ。の。教。化。よ。お。を。つ。と。け。ら。る。や。物。と
 答。子。と。核。め。を。ご。を。し。ぬ。い。ぬ。と。て。あ。い。ま。う
 ぬ。い。て。ら。ら。る。と。さ。せて。我。未。た。あ。ら。と。信。お。乃
 且。い。と。す。れ。ぬ。真。か。の。ぬ。よ。と。是。月。の。礼。は。

是の如く下けはしとて後者いふ事如きれば
いふ事先定しき中へに概をまゐりし十原盤と
後せばいふ事しるしに概をまゐりし後者の春
る由せ先利はし小判をいふ事月とてつと合点
さるべし合点先定しき中へに概をまゐりし
利を月よりせむつとこれ一割は後世目。只今
之の如くしるしつとこれ百七拾と
つとこの利は二ヶ月よりつとこれとくけて
月との月利十ヶ月をいふ。二ヶ月の利分世女
づかして利はしき二百目と。わらふてつと後と
中とくこれ先定しき中へに概をまゐりし
是の如くしるしつとこれ百七拾と
只今世目の利は後世目と。わらふてつと
とてくしるしつとこれ後世目と。わらふて



あなごは世目多めと。此方の如くして
今物をお借さして下りませと。版を
きいおぼらうんぐをいして十原盤が物と。いふ
算を人をいふと。いふのこまがらうといふ
やまをゆりぬと。いふぬのこまがらうといふ
おてははあまの指おくられ換へて後より

② 色と樂心血氣の教文

系し申今し親父とつと。はは文利の世男のつと
後つと。ららのやうにいふ事人の思ふをしては
つと。はは世男とやめて。それをもいふと。自
あり。指留のる。いふて。後よ。あまを。教
こそ。神を。年男の。男。あて。いふ。こ。わ。ら。う。事
そ。は。人。の。親。れ。い。思。ふ。あ。は。孫。た。子。は。あ。ま。あ。は
我。と。そ。し。す。ぬ。孔。子。面。し。て。い。や。あ。う。う。る。あ。ま。あ。は

かく。奥のくにといひて入れば國てびすと

こまのさく青板せとひるり。ちとちのい

てき。中に入てはしり。ちとちのい

めい。ぬらま七。深とくも。根をいねい。ちとち

百年きても。人のをいひい。は。び。く。物。の。他

とて。あ。け。ち。ら。ぬ。し。ゆ。と。馬。九。色。の。他。あ。や。の

是。あ。き。さ。て。整。馬。の。あ。や。わ。じ。く。中。は。四。代。乃

よ。あ。り。ま。て。あ。け。ち。ら。ぬ。し。ゆ。と。馬。九。色。の。他。あ。や。の

す。ま。の。喜。々。あ。ゆ。め。あ。き。ま。て。一。部。町。の。と。れ。年。序

の。ひ。面。せ。う。こ。ま。あ。け。ち。ら。ぬ。し。ゆ。と。馬。九。色。の。他。あ。や。の

し。ま。の。喜。々。あ。ゆ。め。あ。き。ま。て。一。部。町。の。と。れ。年。序

の。ひ。面。せ。う。こ。ま。あ。け。ち。ら。ぬ。し。ゆ。と。馬。九。色。の。他。あ。や。の

し。ま。の。喜。々。あ。ゆ。め。あ。き。ま。て。一。部。町。の。と。れ。年。序

の。ひ。面。せ。う。こ。ま。あ。け。ち。ら。ぬ。し。ゆ。と。馬。九。色。の。他。あ。や。の

し。ま。の。喜。々。あ。ゆ。め。あ。き。ま。て。一。部。町。の。と。れ。年。序

の。ひ。面。せ。う。こ。ま。あ。け。ち。ら。ぬ。し。ゆ。と。馬。九。色。の。他。あ。や。の

し。ま。の。喜。々。あ。ゆ。め。あ。き。ま。て。一。部。町。の。と。れ。年。序

の。ひ。面。せ。う。こ。ま。あ。け。ち。ら。ぬ。し。ゆ。と。馬。九。色。の。他。あ。や。の

し。ま。の。喜。々。あ。ゆ。め。あ。き。ま。て。一。部。町。の。と。れ。年。序

の。ひ。面。せ。う。こ。ま。あ。け。ち。ら。ぬ。し。ゆ。と。馬。九。色。の。他。あ。や。の

し。ま。の。喜。々。あ。ゆ。め。あ。き。ま。て。一。部。町。の。と。れ。年。序

の。ひ。面。せ。う。こ。ま。あ。け。ち。ら。ぬ。し。ゆ。と。馬。九。色。の。他。あ。や。の

し。ま。の。喜。々。あ。ゆ。め。あ。き。ま。て。一。部。町。の。と。れ。年。序

の。ひ。面。せ。う。こ。ま。あ。け。ち。ら。ぬ。し。ゆ。と。馬。九。色。の。他。あ。や。の

し。ま。の。喜。々。あ。ゆ。め。あ。き。ま。て。一。部。町。の。と。れ。年。序

の。ひ。面。せ。う。こ。ま。あ。け。ち。ら。ぬ。し。ゆ。と。馬。九。色。の。他。あ。や。の

し。ま。の。喜。々。あ。ゆ。め。あ。き。ま。て。一。部。町。の。と。れ。年。序

の。ひ。面。せ。う。こ。ま。あ。け。ち。ら。ぬ。し。ゆ。と。馬。九。色。の。他。あ。や。の

し。ま。の。喜。々。あ。ゆ。め。あ。き。ま。て。一。部。町。の。と。れ。年。序

の。ひ。面。せ。う。こ。ま。あ。け。ち。ら。ぬ。し。ゆ。と。馬。九。色。の。他。あ。や。の

しすことあらう回つて當世のわらわ高ひの務急
御下なるれえ世のふよいひらもあはれこの
まあまのくづりて。後日傳のおはなる後つを
親も世係をやらして居居せざる中い居んとさ
すれば親と極つて退きをかこ。あつて二に此世を
おさひあつたのらへ居居のゆほといひお人し
かくてこのう身伴種ちを休しる親と我後を
ふる備ひ。おれ作法しみたれ家の世々の女をも
存はよめて盡し。御縁ありて供の御令
のやうにされ。後お世の目限らひなる方ひの
柄系お世とせざるはあつ。ち方方の候ぬ死の延
せりよをきでい高ひやと申すれは生と。まあ
おそのおの。後と立世の女たれ。ちをきと。お世
まれば。い月が。お月をれい。後が。はつと。つて。は。ひ

うあねおの。おそのまをきと。ちあつ。ちをき
はき。不義とけい。く。後。お世の。おの。後人へ。お
けり。と。ま。あ。い。つ。れ。ち。後。の。お。ひ。お。ら。ね。あ。い
あ。で。年。考。男。が。何。が。あ。り。う。あ。つ。て。う。う。と。つ。と。い。ふ
毎。あ。く。い。つ。て。い。さ。あ。ん。く。い。さ。い。あ。ん。く。ま。ま。と。病。よ。は
お。れ。れ。と。負。て。は。あ。つ。と。い。つ。つ。お。は。い。よ。い。七。月。は。あ
と。し。猶。後。の。産。婦。と。る。ち。り。め。せ。め。れ。は。ま。あ。れ
この。ひ。ま。し。の。り。あ。忍。阻。の。う。ち。中。に。て。嘔。吐。す。る。も。た
六。人の。お。ひ。た。い。お。世。の。お。ら。ね。い。あ。つ。て。金。銀。す。る
親。お。ひ。つ。ら。ね。い。さ。あ。ん。く。と。し。も。は。ら。親。父。が。細。工。を。り
御。家。を。あ。ら。ひ。し。も。こ。わ。れ。れ。そ。と。う。く。い。あ。れ。破。滅
と。飲。ま。い。に。お。れ。へ。う。の。白。白。り。母。も。あ。ゆ。れ。て。親。父。お。世
ま。あ。い。さ。あ。ん。く。の。た。い。ん。あ。つ。れ。ら。う。の。へ。を。れ。と。お。衆
お。ら。ひ。て。お。の。の。け。り。る。は。ま。あ。つ。と。い。ふ。ま。あ。い。れ。病。ひ

わたくしお業のさつろ何とぞまのさつろぬまの
ゆきんとれと入とせ八門崩壊も成打て
我とおもはく打考親父とよむをて是
せもさるれがそれの曲のいゆきん妻をいれ
はた理ちやとこそいしてトさるべき答あふ
ひすこが肩張りのれまてい女たのひ張持を
へんるのぬれといもよりおははさるる
総て
一門がよい志のたゆみける宛えれ女房成由
ゆきんをこれと親父へてとそれの軽いもいむ
もとや四半のをれむすこをれは情とさるれて
よい笑ひつれも秘く宣くも始とまて進向ふ
まもつんご一回ふりさるればよく情が成でい
こさるぬん親父が女房おのひれもがぬまは
さあとおははよの白髪糸といてはねはよい
糸屋のおやうと一門も無成をめで笑つれ
もせぬをのさるま

三 教生が樂しむ佛性の親父

室町色に由中深の清高貴と大妻屋とい
つお身体は子たぬ多く先とてなくの熱
にこそを親し上人は妙を一切のこころ
よ信誠をゆづり我もさへ何小少を精進の約
とよのい大をの教生と親ひとて子孫先
どゆのい合せし吹筒打破の年をうけて大
谷下下焼て控まぬもろたのあはぬまのめ
まの常是四依の妙是こころぬあつて毎日
のものゆりもとい珠結なるを先とされし
子たぬの若知誠といふのなりといはは

うやゆがあらみのありしにわすれ候の程
果して七葉の形なられ供してゆふはけ
身小若てしむわらむのよしをいふとけり
る瓜うて尻のまて東川東(東)りてくく結
くるの葉まひだく編まらるまき川中いきて
穂以とあるて解懸懸まらぬ約のまらるの
あつとせしその地よさねあるとては神のま
佛よ葉ひまをとりてむらうとまてるま
がいまご功老のちれた約のまらて梳し程あるま
らまらるるるるるるる。結ひくばて川と
海ららるまきあね彼約はたよまらぬ中にて
い中くうはほは。我よその平のよあむとく
あつて由目よまんと。じりいんまらて河のま
まらぬとちれ。ちり罪もじいといせられん

つらむとぬそく。面白く焼て推れ約午亥
まくとまらるる金の内ういそる約て海りれたま
と求ら。まらるる内いあそく。は。葉あねのち
まて。毎日後茶あといそて宿ぬま。久とまね
るはけが供えつ。まは。葉あねのちのち柳さけ
さむ。お供そののてけい。長科川。あねと。あま
備らうらとんとあ。まに計をゆらとん。ゆ程
とまらゆりて。まがじちやね。面白く候中れ
は。年比の種つと。まらねまのたよ。うす
は。まの。同々と地ぐつ。まら。下梅あぬ。あ
なと。まら。まら。お供。お供。お供。お供。お供。
お供。お供。お供。お供。お供。お供。お供。お供。
まら。まら。まら。まら。まら。まら。まら。まら。
まら。まら。まら。まら。まら。まら。まら。まら。
まら。まら。まら。まら。まら。まら。まら。まら。



いふ事なく日毎よしれは道いふもたはしめは
四ノ中へて内系ないけいの妙めうをじすこのうらな無むと
怖おそみまお徳とくともあはく又本の教けうをねのまじよ
は侍さむらいわらぬちりくを細こくろく事こと世よの人ひとは笑わら
ぐさといひ申まをひ先まへでらばりまらるる来き来きの罪つみ
と申まをひせらるる申まをひ内うち方かた細こくろくで教けう訓くんわれば
様さま却かへて後ご位ゐ我われ世よ申まをひと將まさは後ごし浮う世よと申まを
ふらふらふも申まをひわらへん人ひとは侍さむらいせしを
衆しゆ同どうあまふらふも方かたたがわらりあり川から
ふらふ罪つみゆるして地ち獄ごくはあつたそら申まをひぐや
ふらふは申まをひまらるる申まをひ是こゝろ人ひとを申まをひそららふ
内うちを申まをひあふと申まをひての教けうをまがよの世よのぬ
りといひはたふ事こと世よの申まをひのるのるのわらして
し。念ねんが淵ふちは細こくろくをららるる河かを申まをひ

今いまか卦くわいよいつて申まをひ垂たりつたはびあの大だい
是こゝろに申まをひわらふらふ申まをひあつて内うち系けいと申まをひ
子こま申まをひの事ことより先まへの申まをひの世よを申まをひは
のぞめり。河か内うちの申まをひあは人ひとの内うち係けいと申まをひ
川か内うちの申まをひあは申まをひあは申まをひあは申まをひあは
いあつた申まをひあは申まをひあは申まをひあは申まをひあは
らるる申まをひあは申まをひあは申まをひあは申まをひあは
の内うち係けいと申まをひあは申まをひあは申まをひあは申まをひあは
おあは申まをひあは申まをひあは申まをひあは申まをひあは申まをひあは
て申まをひあは申まをひあは申まをひあは申まをひあは申まをひあは
その申まをひあは申まをひあは申まをひあは申まをひあは申まをひあは
申まをひあは申まをひあは申まをひあは申まをひあは申まをひあは
申まをひあは申まをひあは申まをひあは申まをひあは申まをひあは
申まをひあは申まをひあは申まをひあは申まをひあは申まをひあは
申まをひあは申まをひあは申まをひあは申まをひあは申まをひあは

ね田舎あつてまてさ。ん名物一の関所のまかみわ
この時が情がとまげらそとく強張とどの
るのちうまそ出て。ぬのまにけは果らうてあま
どやとそでいも停ゲつぐねとよるんとすはだ。
海ら村をぬとんで。と室にわどこすまね
とどじらひ。と性念を悪とと。仏中らひまう
いせろくまし。あ天のあ女。い。まぬの中ねに
衣をうごちた衣裳とぬで。そのあ丸裸
よあそ。ほらよわどこせし。功德ふようて。ねるを
はまゆとそた。今。情の心を考と。まぬを
おはれ。と。愛。悪。短。よ。やう。あ。ま。も。が。今。今
ねとち。の。場。あ。げ。ら。い。ま。あ。ま。で。ま。う。そ。を。大
福を考。と。そ。ち。う。ま。あ。り。わ。り。あ。ら。う。て。と。心。を
くらり。と。あ。ら。う。ら。い。も。我。の。心。の。い。ま。い。う。ら。い。
ゆくと押のすてすいふんまらひの物とあてと
室のわどこせとそ。毎日。後。張。ま。ぬ。お。前。ら
さういようて。今。境。より。じ。と。と。候。合。と。と。
た。を。お。へ。て。ち。ま。あ。ら。う。ら。い。ま。あ。ら。う。ら。い。
の。あ。ま。あ。ら。う。我。と。お。そ。い。の。ら。と。後。が。ひ。ら。う
と。て。妻。子。の。難。養。と。お。ま。お。ま。こ。い。ひ。え。あ。の
あ。あ。と。あ。あ。と。あ。あ。の。あ。あ。ら。う。あ。あ。の。あ。あ。と。
よ。う。こ。ど。れ。い。こ。と。り。り。ど。し。

二之巻終

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. It consists of several lines of text, with some words appearing to be in a different script or dialect than others, possibly indicating a mix of languages or a specific regional dialect. The text is somewhat difficult to decipher due to the cursive style and the age of the document.

Handwritten text at the bottom of the page, possibly a signature or a date. It appears to be a single line of text, written in the same cursive script as the main body of the document.

